

高知大学地域協働学部×稲生

稲生を結ぶ

～10年の歩みとこれから～



目次

まえがき	3
Part1 実習の軌跡 ～これまでの歩みを振り返る～	
高知大学地域協働学部	4
高知県南国市稲生/集落活動センターチーム稲生	5
稲生と大学の10年間 地域の自立を目指して	6～15
Part2 協働の実績 ～成果の背景を紐解く～	
対象の変化 集落から稲生全体へ	16・17
3つのサロンが地域に果たした役割	18・19
地域の声を拾い、届けてきた いなぶつく	20・21
大学生と稲生の協働サイクル	22・23
大学生と稲生の意識の変化	24・25
Part3 私たちの想い ～大学生・教員・地域住民の声～	
成果の裏にあった学生同士の関係性	26・27
教員が担ってきた役割	28
チーム稲生から見た大学生との協働	29
Part4 これから ～「さすていなぶる」の実現に向けて～	
集落から稲生全体へ 10年間の協働	30
持続可能な稲生へ	31
楽しむ姿勢が地域の大きな活力に	32
あそぶ!とむすぶ! ～各世代・一人一人の役割～	33
あとがき	34
制作にあたり、ご協力いただいた方々	35

まえがき

高知大学地域協働学部は大学と地域の協働を通して地域課題の解決と発展に取り組む学部として、全国に先駆け、2015年に設置されました。稲生での実習活動は2016年から開始しました。

本書は、高知県南国市稲生地区における高知大学地域協働学部の約10年の実習活動終了に伴い、制作したものです。

これまで長年、実習を受け入れてくださった稲生は、地域学校協働活動の先進事例として2017年の文部科学省の「社会教育法の改正及び地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン」に詳しく紹介されるなど、社会教育が盛んな地域です。

このような背景のもと協働活動を進めてきた大学と地域の姿を本書「稲生を結ぶ」にまとめました。地域活性化や地域課題解決に取り組む多様な高等教育機関の関係者の皆様に、実践的なノウハウを含む資料として本書を参考にしていただければ幸いです。

また、本書を通して稲生住民が大学との協働の過程を振り返ることで、今後の稲生の姿を考え、未来へ進む活力を高めることを願っています。



高知大学 地域協働学部

2015年4月に高知大学地域協働学部が開設された。地域協働学部は、少子高齢化が進む中山間地域が多い高知県を舞台に、大学生が地域住民と共に地域課題の解決に取り組むプロセスを学ぶ、日本で初めての学部である。

4年間を通して地域課題に真剣に向き合い、様々な視点を取り入れながら地域協働とは何か考え、仲間や地域住民と議論を交わす。大学生は、地域課題、社会課題がさらに深刻化するこれからの社会で生きる、多様な人々と協働する力を日々身に付けている。

1 年生

- 地域の特性や課題を理解し、地域協働の基礎を固める
- 地域活動の体験や住民へのヒアリングを通して、協働のプロセスを体験する

2・3 年生

- 高知県内の各地にある実習地に分属され、2年間継続して実習を行う
- 大学生と実習先のパートナーが協働し、「実践サイクル」を回しながら、地域課題の解決に向けて活動する

4 年生

- 3年生までの学びを活かし、一人一人の関心に沿った卒業研究を行う

④振り返りを地域住民と共有してより良い地域をつくる

①地域を知り、課題を発見

実践サイクル

③企画を実行し、結果を振り返る

②地域住民と話し合いを重ね、大学生の視点で企画を立案

ファシリテーション力の習得、
合意形成のプロセスを経験・学習

↓
これからの地域をつくる人材へと成長する

い な ぶ なんこく 高知県南国市 稲生

稲生は南国市の南部に位置し、14集落からなる。人口1,409人、世帯数708世帯、高齢化率約45%(2025年10月1日時点)の地域である。

稲生はなだらかな山に囲まれた盆地である。米の二期作発祥の地であり、水田風景が広がっている。石灰工業が盛んで、昔は仕事のために移住してきた住民も多かった。特産品は、「ちよひめ」という品種の桃、稲生内に多く自生するびわなどがある。

2005年から、稲生小学校でPTCA(PTAに地域を意味するCommunityを入れた組織)が始まり、小学校を中心に住民による地域活動が盛んに行われている。



地図出典
高知県南国市稲生 [392040650] | 国勢調査
町丁・字等別境界データセット

集落活動センター チーム稲生

稲 集落活動センター チーム稲生

集落活動センター「チーム稲生」は2014年に設立された。集落活動センターとは、内閣府が進める「小さな拠点」づくりの高知県独自の事業であり、地域住民が主体となり、地域課題の解決や集落機能の維持などを推進する。チーム稲生は高知県内で14番目の設立となり、南国市立稲生小学校に隣接する公民館「稲生ふれあい館」を拠点に活動している。

チーム稲生は、毎月2回サロン活動を行い、高齢者の健康づくり、居場所づくりに取り組んでいる。また、毎年6月に稲生の特産物であるびわと桃が販売されるびわもも祭りを開催し、多くの人が集う一大イベントとなっている(びわもも祭りは、文部科学省の公民館GP委託事業より開始)。



稲生と大学の10年間 地域の自立を目指して

2016年から稲生での実習活動を開始し、稲生と大学は共に歩を進めてきた。「地域住民のつながりの強さ」という稲生の大きな社会的資源を活用しながら、大学生ならではの視点が地域づくりに活かされた。

地域と高等教育機関が連携し、地域活性化を目指す取り組みは全国様々な場で行われている。その中では地域の産業に着目して活動を行う例も多い。稲生においては、「住民のつながり」という点に着目することで大学生の柔軟な視点や発想が十分に活かされ、多種多様な企画の実現可能性が高まった。これにより、初期から大学生主体で様々な企画を進めることができ、高い成果が積み重なることで現在の姿に至っている。

みんなでつくろうチーム稲生
チーム稲生を稲生全体で
～これまでとこれから～

05期生
2019～2022

- ・「いなぶっく」第9号～第13号、特別号発行
- ・立石わくわくサロン開始
- ・稲生みらい会議開催

04期生
2018～2021

- ・写真集「紡ぐ」制作と稲生写真館の開催
- ・衣笠集落との連携
- ・衣笠防災ハンドブック制作



衣笠防災ハンドブック

チーム稲生を稲生全体へ

03期生
2017～2020

- ・「いなぶっく」創刊号～第8号発行
- ・小久保サロンきてみいや開始
- ・稲生協働みらい会議開催

02期生
2016～2019

- ・チーム稲生パンフレット制作
- ・小学校との連携
- ・中谷集落での防災活動
- ・紅白アイスクリーム開発
- ・稲生カルタ制作



チーム稲生パンフレット



稲生カルタ



「心なごむいなぶ」歌詞ボード

あそぶ！むすぶ！いなぶ！
09期生
2024～2026

- ・「いなぶっく」第31号～第41号発行
- ・稲生テーマソング「心なごむいなぶ」制作と周知活動
- ・さすていなぶる会議の実施
- ・チーム稲生パンフレット（改訂版）制作
- ・コミュニティブック「稲生を結ぶ」制作

さすていなぶる
08期生
2023～2025

- ・「いなぶっく」第25号～第30号発行
- ・「さすていなぶる」ロゴのデザイン
- ・ロゴ入り缶バッジ・タオルの制作
- ・体育会との連携
- ・稲生をつなぐワークショップ開催



チーム稲生
パンフレット(改訂版)



コミュニティブック
「稲生を結ぶ」

- ・「いなぶっく」第14号～第24号発行
- ・稲生小学校創立150周年記念動画DVD「稲生を繋ぐ」
- ・ワークショップ「稲生を繋ぐ ～未来のためにできること～」開催



タオル



稲生小学校創立150周年
記念動画DVD「稲生を繋ぐ」



缶バッジ



写真集「紡ぐ」

大学が地域に入ることを通じて大きな成果を出すためには、初期段階で地域と大学が「支えられる/支える」フェーズから脱却し、「変わる/変える」(高知大学学長のメッセージより抜粋)フェーズへと移行することがカギとなる。地域住民が主体的に変わろうとする姿勢があってこそ、大学が地域をより良い方向へと変えようとする取り組みが実を結ぶのである。

次ページ以降では、稲生実習班の2～9期生が取り組んだ企画や成果の詳細を代ごとに紹介する。どのような流れで課題を発見し、企画に反映させ、学年を超えた活動が展開されたのか、プロセスをまとめた。

02 期生 模索の中で生まれた視点



防災班制作の逃げ地図

地域理解から始まった実習

稲生との実習が始まり、実習をどのような形で進めるのか大学側も地域側も手探り状態であった。サロンやイベント、行事に参加し、大学生に親しみを持ってもらえるような工夫をしながら地域住民との関わりを増やしていった。

大学生が稲生を理解するために、初年度末に**チーム稲生のパンフレット**を住民と協働で制作した。大学生はパンフレット制作を通して稲生の特徴や取り組みを理解し、以後の活動に活かされた。

3班に分かれて活動

2年生の後期からは7人の学生それぞれの興味関心をもとに、産業班、防災班、学校・子ども班の3つの班に分かれた。

産業班は商品開発に関心を持ち、稲生特産の桃を使った紅白アイスを作り、高知市帯屋町の土曜夜市での販売やお正月サロンでの提供を行った。

防災班は、中谷集落と協力して逃げ地図を制作した。避難所までのルートや防災倉庫、危険な場所、一緒に避難する人の名前や家の場所などの情報をまとめ、1軒ずつ異なる内容の逃げ地図を配布した。

学校・子ども班は稲生で行われてきたPTCA活動や地域と学校の連携をテーマに活動を進めた。稲生小学校と協働し、防災の授業を行い、アンケートを取って分析した。

稲生カルタの制作

また、2期生が制作した**稲生カルタ**は年明け1回目のお正月サロンのレクリエーションとしてその後も受け継がれ、毎年恒例となっている。手描きのイラストと稲生の特徴が盛り込まれた稲生カルタは地域住民の愛着を生んだ。



いなぶっくで情報を発信

2014年にチーム稲生が活動を開始し、大学による実習活動開始からも1年が経過するなかで、チーム稲生の存在や活動が稲生の住民に知られていないという課題があった。

そこで3期生は「**チーム稲生を稲生全体へ**」というコンセプトを掲げ、地域内に稲生の情報を周知させることを目的に**地域情報誌「いなぶっく」**を誕生させた。

発行は2か月に1回行われ、チーム稲生の活動や稲生で行われた行事・イベント、小学生の取り組みなどを取り上げ、幅広い世代の住民が楽しむことができる誌面を作り上げた。さらに、誌面のフォーマットを作り、継続的な発行を可能にした。

いなぶっくを通して住民同士のコミュニケーションが生まれ、また、住民だけではなく大学生の地域理解にも繋がった。いなぶっくについてはP20,21に詳しく記述。

小久保サロンの立ち上げ

公民館と自宅の距離が遠く、ふれあいサロンに参加することが難しい人がいることに着目し、小久保集落と協力し、「**小久保サロンきてみい**」を立ち上げた。運営スタッフとともに周辺住民へのアンケートやワークショップを行ったり、継続的な運営方法について話し合いを重ねたりするなど、スタッフも参加者も楽しく集える場にすることを大切にしたい。運営に関わる住民同士の連携が強化され、住民が地域を自分ごととして考える基礎がつけられた。

稲生協働みらい会議の開催

また、稲生住民が地域内の協働について考えるきっかけをつくる「**稲生協働みらい会議**」を開催した。活動報告や住民によるトークセッション、参加者が自分の役割を宣言するワークショップを行った。住民同士や住民と学生との関係性が深まり、前向きに未来の稲生について考えることができた。



03 期生

地域を変える 基盤づくり



04期生



衣笠集落との防災活動

4期生は様々な集落を訪れ、自治会長と関わりをつくることからスタートした。その中でも衣笠集落に着目し、多世代交流をテーマに活動を始めた。

衣笠集落の防災訓練に参加し、非常時に集落の住民の力で防災活動を行うことが難しいという課題が見つかった。この状況から**衣笠防災ハンドブック**の制作が行われた。アンケートや聞き取りを通して住民が防災において問題と感じていることを理解し、実際に起こりうるケースを想定して制作し、住民に配布された。防災活動を通して衣笠集落の若い世代とのつながりをつくり、交流を深めることができた。



衣笠防災ハンドブック
被災時に役立つ情報がまとめられている

写真から稲生の過去を振り返る

地域住民に昔の稲生の写真を見せた際に、稲生の思い出が次々と語られたことをきっかけに、写真集「**紡ぐ**」を制作し、**稲生写真館**を開催した。

半年近く時間をかけながら、住民に話を聞いたり、ふれあい館にポストを設置したりするなどして稲生の昔の写真を集めた。それらをもとに、稲生ふれあい文化祭で稲生写真館を開催し、後日、写真集「**紡ぐ**」を地区の全世帯に配布した。

地域住民が昔の稲生を思い出し、改めて自分の住む地域への思いを深めた。



写真集「紡ぐ」
稲生住民の活気ある姿を収めた写真が多く掲載されている

先輩の想いを引き継ぎ活動

5期生は、3期生の実習コンセプトから発展させ、「**みんなでつくろうチーム稲生 チーム稲生を稲生全体で～これまでとこれから～**」という稲生住民一人一人に着目した実習コンセプトを立てた。

3期生からいなぶっくの制作を引き継ぎ、いなぶっく会議で住民から改善案などの意見を募ったり、いなぶっくポストを設置したりするなど、地域の声を誌面に取り入れた。実習活動は新型コロナウイルス感染症の影響を受けたが、Facebook版のいなぶっくを発行し、欠号することなく地域に情報を届けてきた。



コロナ禍当時にFacebookに投稿された、いなぶっく特別号
(チーム稲生アカウントにて2020年7月に投稿)

立石サロンの立ち上げ

すでに公民館「稲生ふれあい館」と小久保集落の自治公民館でサロンが行われていたが、さらに稲生全体にサロン活動を広めていくために、立石集落の住民と共に「**立石わくわくサロン**」を立ち上げた。

立石サロン開設後、コロナ禍で現地に行くことができない状況が続いたが、オンラインツールを用いて地域住民と企画の実現に向けて話し合いを重ねた。サロン参加者が楽しく参加できるように防災や歴史、健康などのテーマを設定した。

稲生で3か所目のサロンが生まれたことで、より多くの稲生住民が地域活動に参加しやすくなった。サロンの開設は立石集落の住民の主体性を引き出し、団結力を高めるきっかけとなった。



令和4年度高知県公民館研究大会で活動を発表
(2022年10月7日)



05期生



動画制作のスキルを身に付ける

6期生の活動コンセプトは「**稲生プライドの醸成**」である。5期生が強めた地域とのつながりをさらに多くの住民に広げ、地域愛着を高めることを目的とした。

6期生は入学時からコロナの影響を受け、実習開始後も活動に大きな制限があった。その中でも自分たちができることは何か考え、動画制作に取り組んだことで企画は動き始めた。

当初は自己紹介動画を制作し、サロンで上映することで編集スキルの向上や地域住民との交流を図った。オンライン授業などを通して、日常的にパソコンやインターネットを使用していたため、要領よく編集スキルを身に付けていった。

小学校記念動画の制作

学生が制作した動画を見た地域住民の反応はとても良く、このことをきっかけに**稲生小学校創立150周年記念動画DVD制作の提案**を受けた。

地域住民の協力を得ながら写真や動画を収集し、大学生は編集作業のほぼ全てを自力で進めた。完成後は、150周年記念式典の会場で上映された後、全世帯に配布された。

動画という媒体を通して、当時の住民や地域の雰囲気など多くの情報を残すことができた。6期生によって映像制作が行われたことで稲生実習班の「**形に残るものを地域に残す**」という姿勢はより強まった。

稲生小学校創立150周年記念動画
「稲生を繋ぐ」



継続してきた活動が評価を受ける

また、これまでコロナ禍の活動制限など様々な困難を乗り越えながら地域と大学が協働してきた過程が評価された。

いなぶっくは、高知大学の広報活動をけん引する活動が表彰される、第4回高知大学広報顕彰制度「優秀広報貢献賞」を2021年12月に受賞。

また、2022年7月4日には、NHK高知放送局の情報番組「こうちいちばん」の『こうち34の未来』というコーナーにて大学と稲生の活動が紹介され、ふれあいサロンや小久保サロンの様子が放送された。



08期生
次世代との
協働と意識づけ

役員の世代交代に着目

8期生の1年目は、活動を共にする先輩がいない中での活動であった。すでに実習班を卒業した6期生からいなぶっく制作をレクチャーしてもらうなどしながら、手探りで活動が開始した。

チーム稲生の世代交代に課題意識を持ち、新たに地域の次世代を担う存在として体育会に着目した。そして、稲生の持続可能性を高めることを目標に、「サスティナブル(持続可能性)」と「稲生」をかけた「**さすていなぶる**」というコンセプトを立てた。

びわもも祭りでは体育会と協働でモルック大会を企画し、幅広い世代の地域住民との交流を図った。また、びわもも祭りに参加している子育て世代などの若年層にサロンでの取り組みを知ってもらうことを目的に、パネルでの発表を行った。

「月刊公民館ちゃんねる」
にて取り上げられた2024年
びわもも祭りの動画



「さすていなぶる」の浸透

また、「さすていなぶる」という言葉を地域に浸透させることを目指してロゴをデザインした。地域住民の日常生活に「さすていなぶる」が存在し続けることを目的に、**缶バッジ**と**タオル**を制作した。缶バッジは敬老会で配布され、サロン参加者の中にはカバンに身に付けてくれている人もいます。タオルは地区体育大会で地域住民に配布し、タオルを使用した競技を企画した。

このような活動を通して、体育会の役員や地域住民と交流を図りながらチーム稲生との橋渡し役を担った。そして、両組織の役員に地域の持続可能性向上に向けた連携の必要性を認識させたことに大きな成果がある。



「さすていなぶる」ロゴ
温かみが伝わるフォントとイラストが用いられた



子どもたちに残す
地域の温かさ



09

期生

新たな局面へ
共に成長し、



「さすていなぶる」から 生まれたコンセプト

8期生が生み出した「さすていなぶる」という言葉は地域に大きなインパクトを与えた。その姿を間近で見ていた9期生は、「さすていなぶる」の実現を目指し、さらに具体的な取り組みを反映させた「あそぶ！むすぶ！いなぶ！」というコンセプトを立てた。

「あそぶ！」と「むすぶ！」に企画を分け、「あそぶ！」では、地域住民が「楽しさ」を感じ、主体的に活動に参加することができる取り組みを進めた。

「むすぶ！」では、実習活動が2025年度で終了し、今後、大学生の定期的な地域参加が無くなる未来を見据え、住民が主体的に地域を運営するための体制づくりや意識づけに取り組んだ。

「あそぶ！」 稲生テーマソングの制作

「あそぶ！」を象徴する取り組みとして、稲生テーマソングを制作した。地域の風景や思い出を感じられる楽曲を制作し、子どもたちが歌う姿を発信することで現役世代の地域への愛着向上、地域参加のきっかけづくりを目指した。

実際の制作の過程では、稲生小学校の児童やサロン参加者を対象に歌詞を考えるワークショップを実施し、住民の声を取り入れた。集まったキーワードをもとに大学生が制作を進めた。

完成後はびわもも祭りで小学生と大学生が歌い、来場者の投票で「心なごむいなぶ」というタイトルに決定した。

お披露目後も地域への浸透を目指して継続的に取り組み、サロンでは歌のレクチャーや歌詞ボード制作ワークショップを実施した。

幅広い世代の住民が地域の魅力を感じられる共通のコンテンツとしてテーマソングは力を発揮した。小学生によってサロンでオリジナルの踊りが披露されたり、地域住民によって楽曲をもとにした体操が考えられたりした。

テーマソング「心なごむいなぶ」
制作過程の動画



「むすぶ！」 今後続くサロンを目指して

「むすぶ！」の一環として、小久保・立石サロンの持続可能な運営を目指すための話し合い「さすていなぶる会議」をそれぞれの運営メンバーと共に第4回まで実施した。

会議では、大学生がファシリテーターを務め、地域住民のサロン運営への主体的な姿勢を引き出した。今後のサロン運営を前向きに捉え、行動するきっかけとなった。

地域に残る記録物の制作

さらに、本書コミュニティブック「稲生を結ぶ」の制作、集落活動センターチーム稲生のパンフレットのリニューアルにも取り組み、地域に長く残る記録物を発行した。

また、数々の先輩方の想いを感じながら、いなぶっくの発行にも最後まで取り組み、3期生から始まったいなぶっくは9期生によって第41号まで発行された。



2025年(令和7年)6月20日(金曜日)

びわもも祭りにてテーマソングをお披露目した際の新聞記事
(高知新聞2025年6月20日掲載)



対象の変化

集落から稲生全体へ

2016年から開始した実習活動は徐々に活動の対象を変化させてきた。当初は稲生一部の集落での活動から始まったが、様々な取り組みを通して稲生全体に向けた活動へと発展している。

これらの変化には、長期的に地域をより良く変化させていくための視点が見られる。

地域情報誌「いなぶっく」の発行

2ヶ月に1回、2018年から2026年まで41回発行



サテライトサロンの開設



◀小久保サロン きてみいや

- 2018年開始
- 小久保自治公民館で2ヶ月に1回実施

立石わくわく サロン▶

- 2021年開始
- 立石自治公民館で2ヶ月に1回実施



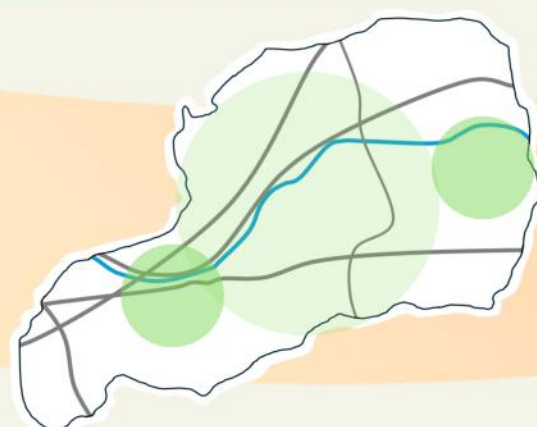
1 一部の集落での活動からスタート



2期生と4期生は集落内の活性化を目指し、中谷集落・衣笠集落での活動に取り組んだ。防災意識の向上を目指した活動が両集落で行われ、有事の際に自分や周囲の命を守るために地域内でつながりをつくることの必要性を問いかけた。

この段階で、大学生の実習活動は稲生全体に広がるものではなく小規模で深くアプローチされるものであった。

2 活動は複数の集落へ



活動を重ねる中で、一部の集落や中心となる集落活動センターだけではなく稲生全体を活性化させる必要があるとの視点が強まっていく。

そこで、地域情報誌「いなぶっく」を発行することで稲生の情報を地域全体に広く発信し、集落を超えたつながりづくりや情報の周知を試みた。

さらに、稲生ふれあい館から離れた場所に住む人々も集える場をつくろうと、3期生が小久保集落で「小久保サロンきてみいや」を、5期生が立石集落で「立石わくわくサロン」を開始した。

これらの活動は複数の集落をまたいで展開され、学生にとっては地域を広く知り、学びを深める機会となった。

3 稲生全体に向けた取り組みへと発展

そして、大学生が実施した企画のターゲットや内容は、稲生全体に向けた取り組みへと発展した。4期生による写真集「紡ぐ」の制作と稲生写真館の開催、6期生による稲生小学校創立150周年記念動画DVD「稲生を繋ぐ」の制作が例に挙げられる。これらは完成後、全住民に向けて発表の場を設け、さらに稲生地区の全世帯に配布された。

実習の成果物として地域に残るものをつくりながら、稲生全体へと働きかけてきた。

4 世代に着目したアプローチ

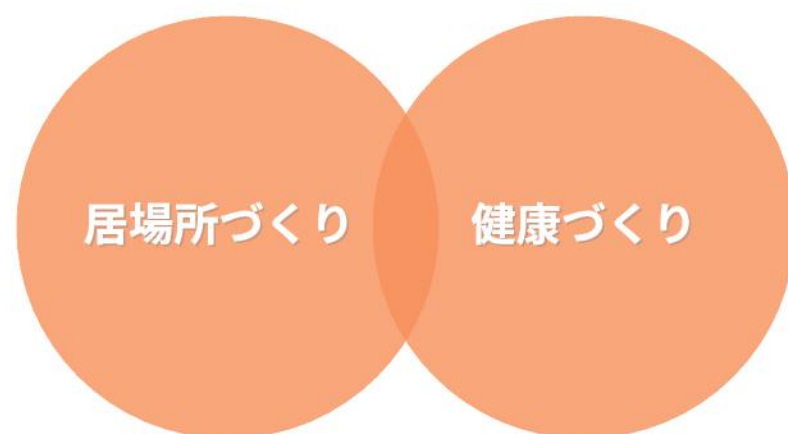
さらに8・9期生では、活動の中で住民の年齢層や世代に着目している点が特徴的である。「稲生全体」という単一的なターゲット像ではなく、世代によって異なる地域参加のあり方を捉えた活動となっている。

8期生は「さすていなぶる」のロゴを制作し、ロゴをもとにしたグッズを住民に配布した。さらに次世代を担う体育会との連携を行い、世代交代の必要性を問いかけた。

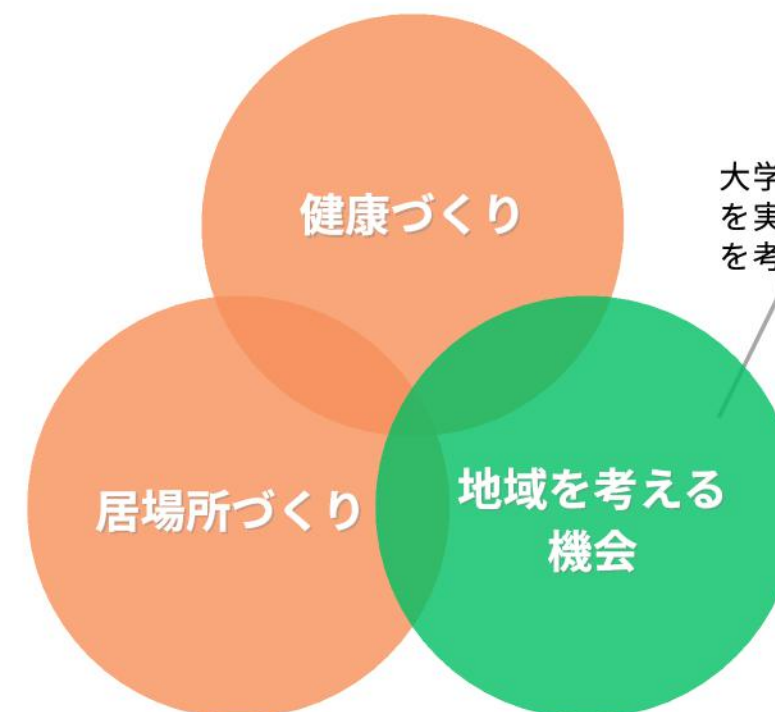
9期生は稲生テーマソング「心なごむいなぶ」を制作し、びわもも祭りでお披露目することで、地域の子どもたちやその保護者といった若年層の地域愛着向上を試みた。

3つのサロンが地域に果たした役割

実習活動が開始するまで、稲生内のサロンは稲生ふれあいサロンだけであったが、大学生が地域と協働して、2つのサロンを立ち上げた。稲生ふれあい館で行われる稲生ふれあいサロン、小久保・立石集落の自治公民館で行われるサテライトサロンの計3つのサロンに参加する中で、大学生はサロンの場で様々な取り組みを行い、地域に多様な効果をもたらしてきた。



参加者と大学生がコミュニケーションをとる
大学生がレクリエーションを企画・実施する



大学生が様々な取り組みを実施し、参加者は地域を考える機会を得る

サロンは3つの役割を持つ場に

居場所づくり・健康づくり

レクリエーションの実施

季節にちなんだクイズや紙コップを使用したゲームなど様々なレクリエーションを実施してきた。参加者の反応を見ながら、大学生は進行方法やルールの改善を重ねた。



サロンを支える地域の方の声



沼 道夫さん

「小久保サロンきてみや」運営スタッフ

小久保だけではなく、いろいろな集落からサロンに参加してくれています。これからも参加者の輪を広げ、小久保サロンを継続して、楽しい場になればと思っています。



浜田 節さん

「立石わくわくサロン」運営スタッフ

防災時に役立つつながりをつくることを目指してサロンを運営しています。今後は若い人も来れる日程で開催したり様々な人が楽しめる内容を考えたりして、ずっと楽しく続けていきたいです。



「北国の春」の体操

毎回のサロンの終わりに、歌謡曲「北国の春」を流しながら体操を行っている。大学生が前に出て手本の動きをしながら、参加者全員で身体を動かす習慣ができている。

地域を考える機会

実習成果の報告

大学生は定期的の実習活動の報告を行った。サロン以外で取り組んでいる大学生の活動を知ってもらい、地域の課題や今後のあり方について大学生と住民の考えを共有した。



多様なワークショップ

地域住民の声をリアルに聞くことができるサロンの場を活用し、大学生は企画の一環で様々なワークショップを行ってきた。参加者は、大学生の問いかけによって地域と向き合う機会を得た。



防災レクリエーション

サロンでは防災をテーマにしたレクリエーションも行われた。防災バッグの紹介や防災食の試食、避難経路を確認するすごろく、クイズなどを通して楽しく防災を学んだ。



いなぶっくの配布

いなぶっくは発行後、サロンの場で配布され、大学生が各ページの内容を紹介した。誌面を読みながら参加者同士で話を深める時間は、地域での取り組みを広く知ることにつながった。



地域の声を拾い、届けてきた いなぶっく

住民の声を誌面に反映

3期生によって生み出された、地域に長く愛されるコーナー

3期生は創刊号から様々なコーナーを設け、地域の方に取材した。中には第41号まで続いたコーナーも存在する。



大学生、なにしゅうが?



ねえ、知っちゃった?



稲生の気になるアノ人

地域住民と共に作り上げる冊子に

5期生はさらに地域の声を反映させた冊子にしようと、稲生ふれあい館に「いなぶっくポスト」を設置し、地域住民の投稿を掲載し始めた。

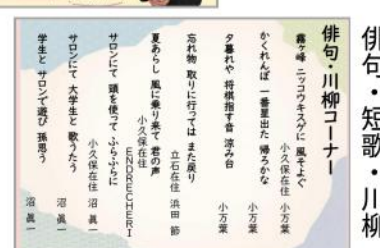
また、6期生や8期生も地域住民から募集した写真や俳句、短歌などを掲載している。これまでに子どもから高齢者まで様々な住民の投稿が誌面を飾った。



いなぶっくポスト



今月の1枚



俳句・短歌・川柳

紙面に娯楽要素を加える

9期生は新たに四コマ漫画や間違い探しを掲載し、子どもから高齢者まで様々な人が楽しめる誌面へとリニューアルした。



オリジナルキャラクター
びわ太郎が登場

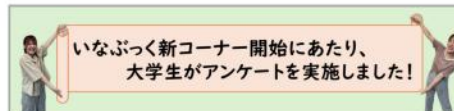
大学生はいなぶっくをより魅力的な冊子にしようと、地域住民の声を傾けてきた。「いなぶっく会議」やチーム稲生の役員会でアドバイスをもらい、反映させた。また、地域住民との何気ない会話の中で新たなアイデアや要望をもらうこともあった。これまで様々な機会を通して地域の声を取り入れ、少しずつ形を変えながら、いなぶっくは地域で愛される冊子として成長した。

2018年から2ヶ月に1回、計41号発行された地域情報誌「いなぶっく」は、先輩から後輩へと引き継がれる過程で誌面の内容を少しずつ変えてきた。これまでに掲載された内容は様々だが、常に「地域住民の声を拾い、届ける」という一貫した役割を果たしてきた。地域住民には新聞折込で配布し、県立図書館並びに南国市立図書館にも保管されている。

デザインを工夫し、読みたくなる冊子に

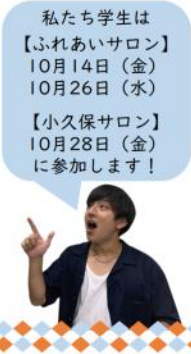
"大学生による制作"という特徴を活かす

大学生の顔写真を入れて作り手の姿を知ってもらい、地域住民にさらに愛着を感じてもらえる冊子にすることを狙った。



表紙やロゴのリニューアル

当初、表紙は写真を掲載するのみであったが、徐々に目次やロゴなどが追加されていった。「ねえ、知っちゃった?」などロゴがリニューアルされたコーナーもあり、誌面の温かな雰囲気をつくりだす効果があった。



編集後記では、取材者の視点からの感想や取材を振り返った文章を掲載し、誌面にメリハリをつけた。



写真のみでシンプル



誌面の内容紹介

行事予定 SNSアカウントのQRコード

いなぶっくならではの温かさを意識

ですます調に統一 教科書体の使用



パステルカラーの背景色

取材内容を効果的に地域に伝えるために、誌面の内容だけではなくレイアウトやデザインにも工夫を凝らしてきた。5期生はいなぶっくの良さを残しながらもデザインに変化を加えた。6期生は出版関係の専門家からアドバイスをもらい、さらにクオリティを底上げした。地域の姿を間近で見てきた大学生ならではのアイデアや感性が活かされ、温かみのある冊子となっている。

大学生と稲生の協働サイクル

地域課題を解決するにあたり、大学生と地域住民の間には良い影響を与え合う関係性が築かれてきた。

稲生住民は大学生を地域の一員として受け入れ、大学生は新しい視点から地域の課題解決のきっかけをつくった。大学生の提案を住民が前向きに捉え、意見することで、大学生も活動への意欲を高めた。互いに意見交換をし、人や資源をつなぎ合わせ企画を進めた。また、代を追うごとに信頼関係を構築し、より深い議論が交わされ、多くの成果を生むことに繋がった。

このような協働サイクルを何度も回しながら、大学生は企画を進めてきた。9期生によるテーマソングの制作を例に、企画が決定するまでの道のりを辿る。

作成日：2025年1月22日	
稲生テーマソング	作成：高知大学地域協働学部 稲生実習生9期生
事業のビジョン	高知大学地域協働学部稲生実習生9期生が考案した、稲生の持続可能な状態を作り出すことを目標とする「さすていなぶる」をベースとし、地域活動への参加を促進したり、稲生への愛着を再認識してもらう機会を提供。最終的に、テーマソングによるノスタルジックを高め、子供たちまでもを食めた地域活動へのアプローチに繋げていく。
稲生の現状	現在の稲生では、地域活動に参加する人が固定化するともに、活動自体に魅力を感じづらくなっているのではないかと考える。また、若い手不足による自治会活動の継続性や、地区同士の繋がりが薄いのではないだろうか。このような背景を踏まえ、「あそび！むすび！いなぶ！～稲生をつくる（楽しい）をつなぐために～」をコンセプトに、稲生と自分の繋がりを見出す人が増える状態を目指していく。
事業概要	
事業名	稲生テーマソング
事業の開始予定	2025年1月
事業の詳細	稲生小学校に民謡運動会の歌のフレーズを添えつつ、小学生やサロンの参加者との歌謡ワークショップを実施。集ったキーワードをもとに学生で歌詞と作曲を行い、現在の小学生の親世代をターゲットにし、ノスタルジックに溢れるような工夫する。びわもも祭りでの曲のタイトルを募集し、決定。そこでみんなで歌うようにし、親世代以上にも曲を認知してもらうようにする。
スケジュール	1月24日(金) 企画説明 来客日 2～3月 歌謡ワークショップ① げんき学童クラブ(日程調整中) 3月14日(金) 歌謡ワークショップ② ふれあいサロン(3月中想定) ～3月末 歌詞づくり (9期生) 4～5月上旬 楽曲づくり (9期生) 5月 仮公開：学童 6月 正式お披露目：制作過程動画と曲 (びわもも祭り) 1/22現在
ポイント	- 地域活動に楽しさを感じる人、地域運営に関わる人を創出 - 主役助になって「楽しむ！」を実感してもらう - 節目としてカタチになる曲を残す

最終的に決定した企画書

再考した企画を提案し、最終決定

企画に深く関係する協力者に再度、提案。実現を共に目指すパートナーとして企画に納得してもらうために、スケジュールや資金面など実現可能な方法を模索する。大学生の熱い想いが伝わり、協力者の賛同が得られた後は、実現に向けて動き始める。

2025年
1月



小学校の校長先生に企画説明を行い、小学校の全面協力が得られることになった

まるっといなぶ ～音楽で繋がる地域の輪～

方法：地域活動への多世代協力・参加を促すための
稲生テーマソングを制作

目的：『さすていなぶる』をベースとした地域を持続可能性に繋げる
状態へと歩みを進める

概要：様々な制約や不安で地域活動に参加できていない住民に対して
まずは音楽を介し一体感を持ってもらう(ターゲットも同じく)

パートナー：チーム稲生と各地区長

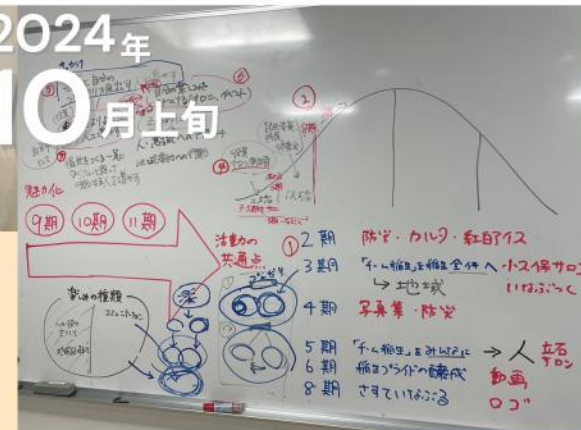
実施に足りないこと
・各地区長との面識
・音楽制作の初期知識 など



企画案を出しながら今後のコンセプトを決定

実習活動の軸となる実習コンセプトを立て、コンセプトに沿った企画を考える。メンバーそれぞれが考えた企画をチームで共有し、意見を出し合う。

2024年
10月上旬



一人一人の考えを共有するために何度もホワイトボードに書いて言語化、図式化

集まる度に何時間も議論を重ねた

課題解決のきっかけづくり
活気づけ

大学生

稲生住民

受け入れ体制の構築
人・資源の提供

10月下旬

企画によってサロン参加者の反応が大きく異なり、地域が本当に求めているものを知った



11月

地域の方に企画を相談し、サロンで企画発表

企画書やスライド資料をもとに、地域の方に大学生の考えを分かりやすく伝える。企画についてアドバイスをもらったり、サロンで企画を発表して地域住民の反応を見たりし、さらに企画を深めていく。



地域の方からのアドバイスを踏まえ、実現可能性を考慮して企画を選考

大学生と稲生の意識の変化

大学生

大学生と稲生は、協働を続ける中で互いに影響を与え、活動に対する意識が少しずつ変化してきた。

その変化は、3つの時期に分けられる。1つ目は、稲生と大学の協働が開始した2016年から。2つ目は、地域も大きな困難に直面した2020年からのコロナ禍。3つ目は、コロナ禍が明け新しいフェーズを迎えた2023年から現在である。

3つの時期を通し、大学生と稲生住民の意識がどのように変化したのかを見ていく。

協働サイクルと意識の変化の関係



協働サイクルが何度も繰り返され、大学生と稲生住民の関係性が築かれた。関係性構築の中で相互作用を起こし、互いに意識の変化が生まれた。

稲生の課題を自分ごとに

サロンやイベント行事への参加、住民へのヒアリングなどを通して、稲生住民とコミュニケーションを図った。住民との会話の中で、大学生に期待する声を聞いたり、稲生での暮らしに対する課題を知ったりすることで、地域の課題を自分ごととして捉えるようになった。

時には住民と議論を交わすこともあったが、大学生の興味関心だけではなく、地域が必要としていることを読み取り、企画に反映するようになった。

協働開始

2016～



稲生住民

協働の基盤づくり

稲生では※PTCA活動を通して、大学との協働が始まる前から地域コミュニティの基礎がつけられてきた。教育機関と地域の連携を積極的に捉え、大学生を前向きに迎え入れた。

また、住民で話し合っ地域運営を決める意識が根付いていた。大学生にも同様に、率直に住民としての想いや意見を伝え合う意識を持ち、大学生と稲生の協働の基盤を築くことにつながった。

※2005年から稲生小学校でPTCA(PTAに地域を意味するCommunityを入れた組織)が始まり、小学校を中心に住民による地域活動が盛んに行われている。

決して活動を止めない

コロナの流行によって大学構内への入構が制限され、現地での実習も行うことができなくなってしまった。

活動制限を大きく受けながらも、地域に情報を届けるために、いなぶっくの発行を継続した。また、リモートでサロンを開催するなど、できることを探した。

現地に行けない代わりに、オンラインツールの活用や動画作成のスキル習得を進め、コロナ禍でも稲生住民とのつながりを保ち続けられる方法を模索した。

コロナ禍

2020～



地域の集いの場を守る

コロナの流行初期の約3カ月、公民館活動は制限を受けたが、その他の期間は活動を止めることなく続けた。稲生で暮らす高齢者の引きこもりを避けるために、感染症対策を十分に行いながらサロンを開催した。サテライトサロンでも、大学生とオンラインで繋ぎ、サロンを行った。

今までにない非常事態でも地域課題を予測し、活動を続けるという意識によって、地域の団結力を高め、コロナ終息後もスムーズに活動を再開することができた。

持続可能な姿を目指す

2期生からの稲生との協働が続き、学生の視点は、「自分たちが興味を持っていること」から「将来の稲生が続くために今何をする必要があるのか」という課題意識に変化した。

そして、持続可能な稲生をつくっていくという意味が込められた「さすていなぶる」という概念が生まれ、地域のリーダーの世代交代を新たな目標にした。

現在

2023～



世代交代を意識した運営へ

チーム稲生の役員の高齢化に伴い、大学生が掲げた「さすていなぶる」の考え方を受け入れ、今後の稲生を前向きに考える意識が生まれた。

チーム稲生の役員だけではなく、他の組織との交流を図ったり、今まで行われてきた行事やイベントを今後どうやって持続的に運営するのか考えたりするようになった。



成果の裏にあった 学生同士の関係性

活動を通して学生同士の関係性は変化し、実習成果に大きく影響を与えた。

3期生の蔵文音さんと土居由希さん、5期生の今村かのんさんと谷澤都さんに苦労したことや印象深いエピソードなど、当時のお話をうかがった。お聞きした話や9期生の学生の経験をもとに、学生同士の関係性についてまとめた。

左から3期生の蔵文音さんと土居由希さん、5期生の今村かのんさんと谷澤都さん

同級生

実習の成果を語る上で
欠かせない、
同級生の関係性。
多くの時間を共にする中で
結束力を高めてきた。

01 個々の得意分野を活かした役割分担

メンバーそれぞれの得意分野を活かして自然と役割が分担され、一人一人がチームに貢献していた。これにより個々が自信を高め、主体性やモチベーションの向上、稲生班全体の成果へと繋がった。

また、メンバー間でサポートし合う空気感があったため、苦手なことにも自ら挑戦することができ、チーム全体だけではなく個人も大きく成長することができた。

02 根気強く話し合い、チームの不和に対処

時には学生間で意見がぶつかることもあった。モチベーションの違いや作業量の偏り、メンバーの性格の違いなど様々な要因があるが、どの学年もメンバー間で率直に意見を言い合い、解決を目指してきた。

卒業生は数年前を振り返り、当時の悩みを懐かしそうに話した。壁にぶつかりながらもまっすぐ向き合った経験が、現在の卒業生の姿に活かされている。

03 実習コンセプトが共通のゴールに

学年ごとに実習コンセプトを設定し、活動を進めてきた。地域の課題や今後の活動について話し合い、活動の軸となるコンセプトを決め、3年生で様々な活動を展開していく。話し合いの過程で多くの議論を重ねることで学生間で共通認識を持つことができた。

3年生の活動においても、迷いや不安が生じたとき、実習コンセプトに立ち返り、目標や理想像を再認識することができた。

先輩・後輩

後輩は多くのことを先輩から学んだ。

各学年のカラーを認め合いながら、切磋琢磨してきた関係性がある。

01 実習への姿勢に共感し、稲生を選択

地域協働学部の学生は1年生の終了時に実習地を選択し、配属先が決定する。代々、先輩の意欲的な姿や真面目さ、活発さなどを魅力に感じた学生たちがこれまで稲生を選んできた。また、活動頻度の高さからモチベーションの高い学生が集まる傾向にある。

個々のモチベーションの度合いや性格、雰囲気などが似た学生が集まり、一丸となって実習に取り組んできた。

03 後輩を成長させた言葉

後輩は先輩から、サロンでのレクリエーションの内容や活動時の振る舞いなど様々な視点でアドバイスをもらい、試行錯誤のもとに成長を重ねてきた。先輩の経験による的確なアドバイスは後輩に多くの学びを与えた。

また、地域情報誌「いなぶっく」の発行の際には先輩からの校正を受けることで、クオリティを年々向上させてきた。

6期生が稲生小学校創立150周年記念動画DVDを制作した際には、プレッシャーを感じていた6期生に5期生が先輩として励ましの言葉をかけたという。

アドバイスをするだけではなく常に優しく寄り添い、後輩を見守る姿勢があったからこそ、学年を超えて良好な関係が築かれた。

02 先輩の背中を見て学ぶ実習への向き合い方

実習を通して関わる人と信頼関係を築くためにどのような振る舞いをするべきか、後輩は1年先に行く先輩の姿を見て多くのことを学んだ。

気持ちの良い挨拶や適切な言葉遣い、速やかな連絡、時間を守るなど、些細なことでも丁寧に取り組むことで信頼が生まれていく。

また、地域住民と細やかにコミュニケーションを取り、大学生らしい明るく元気な姿で地域にパワーを与える先輩の姿を目にした後輩は、自然と同様の振る舞いを身に付ける。3期生の活動を間近で見てきた5期生は、「自分たちもこうなりたい」と先輩の姿が目標であったそう。

歴代の学生が地域住民との間に積み重ねてきた信頼関係によって、これまで大学生の企画に好意的なサポートが得られてきた。

04 受け継がれる想い

先輩の活動を発展させ、代々コンセプトがつくられた。

8期生の「さすていなぶる」から9期生の「あそぶ！むすぶ！いなぶ！」が生まれたように、コンセプトに込めた想いは先輩から後輩へと引き継がれた。

先輩が継続してきた活動の意義を理解し、自らの活動に活かした。



稲生大同窓会にて撮影(2025年11月1日)

教員が担った役割

稲生と大学の協働が成功に至るには、担当教員の存在が欠かせなかった。地域と大学の連携をスムーズに進めるためにどのような想いを持ってサポートしてきたのか伺った。

稲生の皆さんの思いに応えること

人は誰でも他者に必要とされる力を持っています。わが身の必要のみならず、そうした力が発揮肯定されるとき、人は個性を持ったかけがえのない自分を確認することができます。地域社会は、こうした相互依存のネットワークが深く、広くなることで発展してきました。

一方で他者に必要とされる力は、「学ぶ」という人間に備わっているもう一つの力によって不断に高められます。自分も含め人々が必要としているものを感じ取り、理解する力は、「学ぶ」ことで確かなものとなります。「学ぶ」とは、多くの他者の必要に応えられるようになることであり、多くの人々と共感しつつ生きる自己を形成することでもあります。

稲生は、まさに人々が学び合う場をつくり出している地域。学生たちには、どのような企画を実践するか以上に、稲生の皆さんが大事にしていることを自身の内なる求めとして捉え直す「学び」をしてもらいたい。それが稲生の皆さんの思いにも応えることではないか、そんなことを考えてきました。



2期生担当
内田 純一 先生

思いを受け止め、人をつなげる試行錯誤

稲生には、お祭りやお米、ピワ、石灰など、大事なものがたくさんあって、いろんな思いがあって、地域のために動ける方がたくさんいました。

学生たちは自分たちに何ができるのだろうかかと模索し続けていましたが、まずはたくさん話を聞いて思いを受け止めること、そこで見つけた大事なものを受け継いでいくこと、そのために地域の方たちをつなげていくことを試みてきました。

地域の方たちのところに飛び込んだり、いろんな企画を提案することに躊躇する学生たちの背中を押しつづけることが私の仕事だったかなと思っています。そのなかで試行錯誤を重ねる学生たちに小さくてもいいから成功体験と形として残るものを作っていってほしいと願っていました。

学生も地域も教員も一緒に育つ実習を

若い頃、学生たちを中山間地域のあちらこちらに連れていき、調査研究活動を行ってきました。学生たちは調査報告を行い、何やら若者の視点で提案をします。しかし、それが繰り返されるだけで地域は全く変わっていきませんでした。

全国初の「地域協働学部」が開設され、学生にも地域にも学びを提供する実習をどのようにしていけばよいのか、地域が変わっていく実践ができるのだろうか。難しい課題を抱えて実習がはじまりましたが、稲生の皆様とともに多くの対話と経験を重ね、協働の実践活動を行うことができました。

そして、今、私たちの活動に一区切りを迎えるわけですが、稲生で育てていただいた学生たちは、稲生実習を「誇り」にして、それぞれの道を歩んでいます。稲生の皆様も、大学との活動の中で感じたり、考えたり、動いてきたことを、これからも深めていって「さすていなぶる」な地域をつくっていかれることを願っています。いつも地域協働学部の理念をご理解いただき、素晴らしい実習をさせていただきました。心より御礼申し上げます。



3・5・6・8・9期生担当
玉里 恵美子 先生

チーム稲生から見た大学生との協働

集落活動センター「チーム稲生」会長の山崎 昇さん、副会長の浜田 美都子さんにインタビューした。協働パートナーから見た大学生はどう映っていたのだろうか。



チーム稲生 会長 **山崎 昇** さん

大学との10年間の協働を経て、地域にどんな変化があったと思いますか？

チーム稲生が設立され、公民館の機能に加え、集落活動センターの取り組みを行う中で、大学生と共に活動を進めてきました。

この10年間でふれあい館を中心に稲生全体に大学生との活動が広がっていきました。大学生との協働が始まる前は、集落ごとに地域活動が行われている状態でした。そこに大学生が加わり、小久保サロン、立石サロンの設立などを通して集落ごとが繋がりはじめ、稲生全体に活動を巻き込んでいくことができたと思います。

これからの稲生についてどのように考えていますか？

チーム稲生の役員の高齢化という課題に対して、自分たちがやってきた活動に協力してくれる50、60代の人とつながりをつくっていきたいと思っています。今まで稲生で行ってきた活動が途切れてしまわないように、若い人とのつながりを大切にしたいです。

今後さらに高齢化が進む中で、自分自身が元気に動ける間は、今までたくさんの人に助けてもらった恩を返すためにも、稲生のために活動したいと考えています。



チーム稲生 副会長 **浜田 美都子** さん

大学生がふれあいサロン関わる中で変化したことはありますか？

現在はふれあいサロンで毎回レクリエーションを行っています。サロンが始まった当初はあまりレクリエーションを行っていませんでした。サロンは地域の人が集う場なので、参加者が一体となって楽しく過ごせる場づくりを意識し、レクリエーションを実施するようになりました。

サロンに大学生が関わるようになり、参加者も元気をもらっていたと思います。大学生も始めはレクリエーションの進行に慣れていない様子でしたが、繰り返すうちに上達し、成長を感じていました。

美都子さんが大学生と関わる際に意識していたことはありますか？

大学生は授業の一環で稲生に勉強しに来ているので、社会に出て役に立つような、人と関わる姿勢を身に付けることを大切にしてもらいたいと思っています。

また、大学生が地域で学べるように、労働力として扱うのではなく、楽しく関わることを意識していました。地域協働学部の実習という位置づけで大学生に来てもらうことを嬉しく思っていたので、10年間実習が楽しく続いてきたのだと思います。

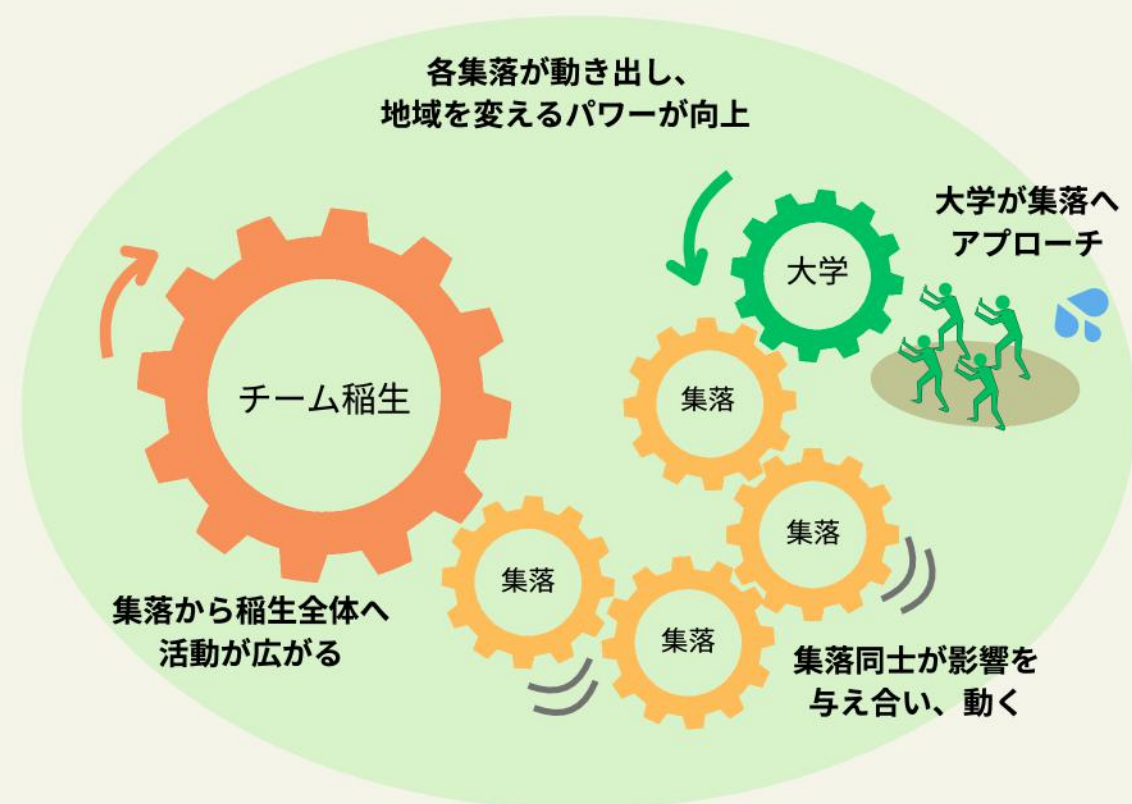
集落から稲生全体へ 10年間の協働

協働によって集落単位の活動が「動き出す」

大学とチーム稲生が協働パートナーとして活動が始まり、大学はそれぞれの集落とつながりを持つことから始めた。中谷集落、衣笠集落での防災活動、小久保サロンや立石サロンの設立を通し、各集落で地域活動が動き始めた。

集落から稲生全体へ「広がる」

集落単位での活動が継続され、集落が活発化した。加えて、いなぶっくで集落内の活動を地域情報として発信するなど、大学生が集落同士を繋ぐ役割を担った。さらに、集落を越えたつながりが住民主体でつくられ、チーム稲生を中心に稲生全体へ活動の輪が広がった。



次の課題は「縦のつながり」

大学との協働が始まり、集落から稲生全体へ広く、深くつながりをつくった10年間であった。大学と稲生の協働が一区切りつく今、10年間の積み重ねを今後の稲生に繋げていく段階にある。

次に稲生が目指す段階として、今まで行ってきた地域活動やつながりを継続させていくことが挙げられる。現段階では、組織や集落間の「横のつながり」が稲生全体に広がっている一方で、地域のリーダーとして主体的に活動している世代とその下の世代の「縦のつながり」は弱い。今までの10年間の変化を活かし、今後、稲生が長く活動を続けていくためには、稲生の持続可能性(Sustainable)を考えていく必要がある。

持続可能な稲生へ

持続可能な稲生＝「さすていなぶる」とは？

「10年後も20年後も、さらに先にも稲生が続いていく状態をつくろう」という意味を含め、8期生が「さすていなぶる」という言葉を生み出した。住民が稲生や地域活動、組織に対して愛着を持ち、世代を越えて住民主体で活動が引き継がれていくことで、稲生が持続可能に、「さすていなぶる」な状態になる。「さすていなぶる」という概念は、すでに地域に浸透し、稲生の未来を考える合言葉となっている。

サスティナブル
Sustainable



いなぶ
稲生



タオルを使った体操も紹介された



地区体育会で発表されたコピーとロゴ
(写真はいすれも南国市稲生)



「さすていなぶる」な稲生に 南国市

高知大生がロゴ考案 「ずっと元気な地域に」

【香長】合言葉は「さすていなぶる」。南国市稲生で地域おこし活動に取り組む高知大学地域協働学部が、地域が一体感を持って盛り上がるためのキャッチコピーとロゴマークを制作した。このほど稲生小学校で開かれた地区体育大会でロゴ入りのタオルが配られ、学生考案の体操なども紹介された。

同学部では学生が県内各地に入り、自ら地域の課題を見つけ解決策を探る研究を続けている。稲生地区は現在、第8、9期生となる2、3年生9人が活動しており、集落活動センター「チーム稲生」の行事や、地域広報誌の発行などに参加している。

今回制作したキャッチコピーは「持続可能」を意味する「サスティナブル」と「稲生」を掛け、ロゴは特産の桃の絵とピワのオレンジ色を基調にした。学生たちが活動の中で感じたのは、地域の高齢化が進む中でも、若い世代が少なからずいるということ。3年生の浜口桃菜さん(21)は「20年、30年先も稲生が元気であるため、世代間の架け橋になるきっかけにしたいと考えたと話す」。

10月下旬、子どもからお年寄りまで地域住民が一堂に会する地区体育大会で発表。スポーツタオル(縦20寸、横1寸)を製作し開会式で配布した。参加者は学生が考案した、タオルをつかんで体をほぐす体操や、2人1組で持ったタオルをお手玉を乗せて走る競技などを楽しんだ。

地区体育会の弘光隆会長(55)は「学生たちの力で地域が活性化している。タオルを見るたびに稲生のことを考えると思う」と笑顔で話した。(佐藤邦昭)

2024年(令和6年)11月29日(金曜日)

8期生が稲生地区体育大会で「さすていなぶる」のロゴ入りタオルを配布した際の新聞記事(高知新聞2024年11月29日掲載)

楽しむ姿勢が地域の大きな活力に

学生と地域が共に楽しむ

10年間の稲生と大学の協働の成果の背景には、何よりも大学生自身が実習活動を楽しみ、地域を盛り上げようと努力する姿勢があった。大学生は稲生での実習活動において、ただ参加するだけではなく、稲生のことをポジティブに捉え、楽しみながら自分ごととしての意識を強めてきた。

大学生が楽しみながら地域と関わる姿勢を引き出したのは、稲生を愛し、稲生での生活を楽しむ、たくさんの地域住民である。稲生と大学生は共に楽しみながら今日まで歩んできた。

楽しむことは大きな原動力になり、地域を変える力を持つ。稲生に関わる全ての人に今後も地域活動を楽しみ続けてほしい。

地域活動を楽しんだ先にある、「さすていなふる」

地域活動を楽しもうという想いが込められた言葉「あそぶ！むすぶ！いなぶ！」。9期生が掲げた実習コンセプトである。

持続可能な稲生を目指すためには、何よりも住民自身が楽しんで活動を行うこと＝「あそぶ！」と、多世代が連携し活動が続けていくこと＝「むすぶ！」が大切である。

楽しみながら、幅広い世代の住民が地域と関わり続けた先に、持続可能な稲生の実現がある。



あそぶ！

地域活動を楽しむ姿勢

稲生の活気を生み続けるためには、住民が主役となり、地域活動を楽しむことが何よりも大切である。

稲生住民が自分の得意なこと、やってみたいことを活かして挑戦することで、さらに新しい活動が生まれていく。

むすぶ！

次世代に繋いでいく姿勢

今、行っている活動を次の世代に繋げていくために、稲生に住む多世代がコミュニケーションを取り、つながりをつくる。

一人一人の稲生への思いからできた地域のつながりが、10年、20年、さらに先へと世代を結び、稲生を形作っていく。

あそぶ！とむすぶ！ ～各世代・一人一人の役割～

今後の地域活動の力ギとなる「あそぶ！」と「むすぶ！」。稲生に関わる全ての人が自分自身の役割を考え、「あそぶ！」と「むすぶ！」を担っていく姿勢がこれからの稲生をつくる。

10代

あそぶ！ ・地域学習で楽しく稲生について学ぶ

むすぶ！ ・稲生について考え、現在や未来、地域とどう関わりたいか自分の考えを持つ



20代

あそぶ！ ・地域イベントに楽しく参加し続ける

むすぶ！ ・家族や友人、知り合いとのつながりを大切にし、稲生に関心を持ち続ける



30～

40代

あそぶ！ ・日々の生活の中で幅広い世代と楽しみながらコミュニケーションをとる

むすぶ！ ・様々な地域行事やイベントに参加し、上の世代の役割を将来的に引き継ぐことを意識する



50～

60代

あそぶ！ ・楽しみながら仲間と共に地域活動の運営に関わる

むすぶ！ ・今まで地域で行われてきた活動を引き継ぐ



70代

あそぶ！ ・多世代が楽しみ、コミュニケーションがとれる地域の雰囲気をつくる

むすぶ！ ・稲生内の様々な組織や多世代が連携・協力する機会を増やす



80代～

あそぶ！ ・自分の生きがいを見つめ直す

むすぶ！ ・今までの稲生のことを若い世代や子どもに伝える



世代を超え、一人一人が「さすていなふる」の実現を目指そう



9期生制作「心なごむいなぶ」歌詞ボード

あとがき

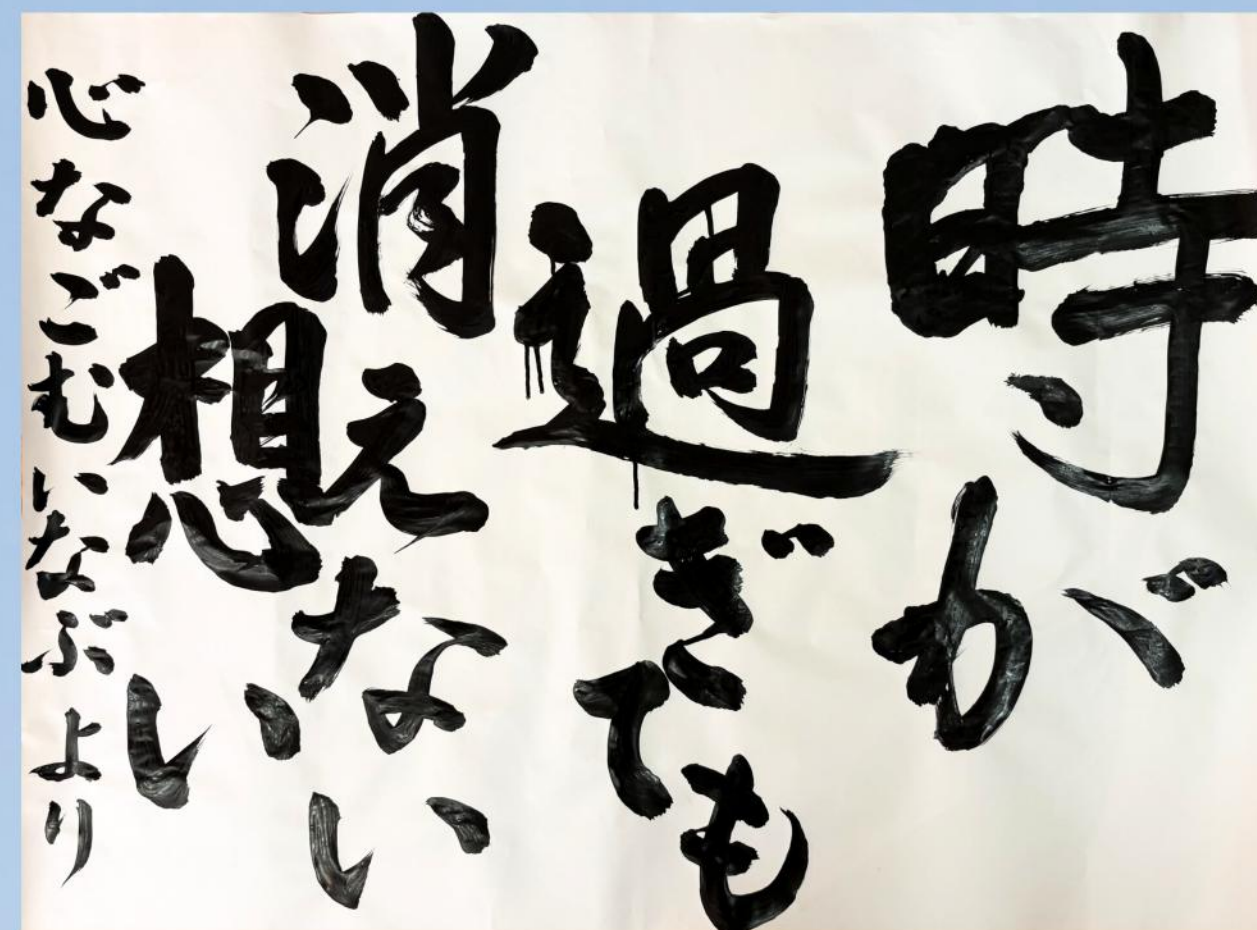
制作にあたり、多くの稲生の方々にご協力いただき、感謝申し上げます。
稲生の方々の想いを胸に、本書を制作できたことを嬉しく思います。

稲生と大学の10年間の協働を一つ一つ振り返り、多くの方が稲生への熱い想いを
持ち、力を合わせて歩んできたことを実感しました。
たくさんの方々の想いを受け継ぎ、稲生実習班9期生として活動できた日々は何事
にも代えがたいものです。

私たちと協働してきた10年間でみなさんの心の奥に残り、これからの稲生の糧と
なれば嬉しく思います。

本書が稲生の未来に少しでも役立つことを願っています。

高知大学地域協働学部稲生実習班9期生
足立 風薫・室 結子



「時が過ぎても消えない想い」 足立 風薫 書

本書の制作にあたり、ご協力いただいた方々

チーム稲生の役員をはじめとした稲生のみなさん

稲生実習班2期生担当教員 内田 純一先生

稲生実習班4期生担当教員 田中 求先生

稲生実習班3・5・6・8・9期生担当教員 玉里 恵美子先生

公立大学法人旭川市立大学新学部設置準備室 出口 寿久教授

稲生実習班の先輩方

これまで共に活動してきた9期生のメンバー



高知大学地域協働学部稲生実習班

2026年1月発行
南国市学生まちづくり協働事業費補助金による制作